

[退職記念講演]

## 中国と私の半世紀



近藤 龍夫\*

**林晃史 教授** 近藤先生のご紹介をしたいと思います。近藤先生は1934年にお生まれになり、来年70歳で定年を迎えられます。大阪外国語大学中国語学科をご卒業のあと、59年から62年まで国立台湾大学文学部歴史研究所に修士入学され、その後朝日新聞社にお入りになりました。1973年から77年まで、朝日新聞香港支局長として香港に滞在され、78年から81年まで北京支局長として赴任されました。さらに84年から87年まで、もう一度、北京支局長として赴任されております。

ご帰国後、本社に戻り外報部長、名古屋、東京本社編集局次長を経て、1993年から98年まで朝日新聞の英字紙をつくっている『英文朝日』の社長をなさっています。98年に退職され、この敬愛大学国際学部にご着任になりました。私たちに馴染みが深いのは、2000年8月から04年3月まで約3年半、国際学部の学部長を務められたというご経歴です。この間、様々なご指導をいただきました。

---

\*こんどう・たつお：敬愛大学国際学部教授 現代中国論

Professor of Chinese Government and Politics, Faculty of International Studies, Keiai University; modern China. (2005年3月退職)

いまのご経歴でもおわかりのように、中国、香港について大変お詳しい方なので、その関係のご本を書かれています。いくつかご紹介しますと、まず単著としては『国際都市香港の夜と昼』が朝日ソノラマ社から出ています。もう一つ香港に関して『国際都市香港』という本を、やはり朝日ソノラマ社から出されています。また共著のかたちで『中国大観』、『中国を知る』、『現代中国をつくった人びと』という本を出されています。

以上、非常に簡単ではありますが、ご紹介をさせていただきました。それではこれから約1時間、先生からのお話を伺いたいと思います。

ただいまご紹介いただいた近藤です。きょうは大変残念ですが、私、風邪をひいてしまい、声がどうしても治らなくてお聞きづらいところがあるかもしれませんが、お許してください。

演題であります、「中国」と「私の半世紀」という大きなテーマにしてしまい、困ったことになった、50年間の話をするのはとんでもないことだと、実は参っているところです。お手元にお配りしたレジュメの4ページ目のところをお話しして、「50年間」にしたいと思っています。

## 台湾留学と将来展望

私と中国の関わりは、大学で中国語を始めたことを起点にしています。1954年のことですから、偽りなく今年で50年になります。なぜ大学に入って中国語を始めたのか、皆さんの前で言うのも恥ずかしいことですが、中国をやりたい、中国語を勉強したいと思って大学に入ったのではない。私の頃も受験難で、何とかして大学に入らなければならない、どこが入りやすいか。選択の結果、大阪外国語大学の中国語科は入りやすいということになった。当時、国立大学の入試は一期、二期に分かれ、一期が駄目なら二期に行く人が多く、大阪外国語大学は二期で、私は一期が駄目だったから二期に行ったわけです。そして中国語を勉強しはじめたのですが、正直言って——ここに大勢の学生がいるので、参考にしてもらおうと困るのだが——初めから中国語を習うのが嫌だった。なぜ嫌だったか。当時、立派な

教科書などなく、中国語を教える先生が作製したガリ版刷りの資料を教科書代りにして授業が行われたのです。その資料には絵がいろいろ描いてある。人が立ったり座ったり、犬かアヒルかわからないような動物が走ったりしている絵が描いてあるわけです。それを中国語で先生が声を出して読み、学生はその絵に描かれた動作を真似する。「立て」と言えば立つ、「座れ」と言ったら座る。おじぎをせよと言ったらおじぎをする。それを最初の時間からやるわけです。人をバカにしているのではないか。大学生がこんなことをやるのか、早くやめたいと思いました。しかし、もともと怠け者なのでダラダラやっているうちに卒業してしまいましたが、できるだけ早く中国語から離れたい、というのが正直なところでした。

しかし人生は面白いですね。望んでいない方向に進むことがある。就職は決まっておりましたが、卒業間際に、台湾への留学生募集の知らせが学校の掲示板に出ました。当時、日本は台湾の中華民国—国民党政府と国交を結んでいました。大陸には1949年、中華人民共和国が成立していましたが、大陸との間には国交がない。われわれ一般の者は大陸に行きたくても行けない時代でした。それで台湾政府の教育部——日本の文部省に当たる——が留学生を募集しているというので調べてみると、日台間での、いわば交換留学生のような制度であることがわかりました。台湾からは大勢の学生が日本に来たいと希望し、競争が激しいが、日本から台湾に行きたいという人はあまりいない。せっかく就職も決まっていたのですが、「では行ってみるか」と応募してみたら、行けることになった。それで、私は台湾に留学しました。

いまの台湾大学、日本統治時代の台北帝国大学の大学院へ行ったのですが、応募に当たって大学の推薦状が必要でした。推薦状がほしいと申し出ると、当時の大阪外国語大学中国語科教授会では、「共産党と戦争して負け、台湾に逃げていった連中のところへ、何をしに行くんだ。そんなところに行くやつに推薦状を書く必要はない」という意見もあり、また「台湾などに行くと、将来は中国大陆に行けない。それでもいいのか」という意見もあったそうです。しかし、主任の先生が「将来はどうなるかわからないけ

れども、若いうちだから、君が行きたいというのなら行きなさい」と言って推薦状を書いてくださった。

当時日本では、中華人民共和国について、どういう国なのか、どういうことが行われているのか、正直わからなかった。大学で中国問題を研究していた先生たちも、実際に大陸の社会はどうなっているのかよくわからなかった。ただ、革命が成功して、いままでバラバラだった中国が統一され、大変な国ができた。だから大陸について一生懸命勉強するのは意味があるが、台湾などに行っても仕方ないという考えが支配的でした。しかし、私は将来どうなるかわからないけれども、とにかく行ってみようと思った。いちばん嫌がっていた中国語および中国との関係を絶つどころか、逆にそのわなにはまりに行っちゃったわけです。ただ、いま振り返ってみると、行っておいてよかった。大変勉強になりました。その後、私が新聞記者の仕事をしていくうえで、留学時代に得たものが非常に役に立ちました。

私は、1998年から今年まで7年近くこの大学でお世話になっていますが、私は学者でもありませんし、研究者でもありません。いまだに新聞記者としてのものの見方、あるいは考え方で中国を見ています。大学でも学生諸君にそういう立場で教えています。「教える」と言うとおこがましいので、学生諸君と一緒に中国問題を考えている、と言ったほうがいいかもしれません。この大学でお世話になろうと思った理由の一つに、いままで自分が中国と関わってきたことを、一度ゆっくり整理する機会を持ちたいという考えがありました。正直に言ってまだ整理はできていません。したがってきょうは、未整理のまま、新聞記者の立場で皆さんにお話ししたいと思います。

## 文化大革命とかけ出し記者時代

先ほど申し上げたように、私の中国との関わりは不純な考えからの出発でした。そして留学の途中、新聞社の試験があるというので帰国し、朝日新聞社に入ったわけです。新聞社というのは、それぞれの会社によって違うとは思いますが——朝日新聞の場合はいまでもそうだと思いますが——

入社して3年から4年、地方支局勤務をし、そこで記者の修業をします。交通事故から殺人、火事の取材など新聞記者のいろはを勉強するのです。そのあと本社に上がって、政治、経済、国際問題、あるいは文学、芸術など専門的な分野に分かれて仕事をします。私が国際問題、中国問題に本格的に取り組んだのは、中国で文化大革命が起きた1966年のことです。この文革については、当時、世界中が「中国はいったいどうなるのだろうか」と大変注目したものです。私は大阪本社にいたのですが、中国問題に取り組める記者として、急遽、東京本社で国際問題を担当する外報部へ異動が決まり、カバン一つで東京に発ちました。それから本格的に中国問題に取り組んだわけです。文化大革命については、正直、私は最初、どういうことなのかわかりませんでした。ご年配の方はご記憶があると思いますが、赤い腕章を巻いた紅衛兵という若者が町中を練り歩き、年とった指導者を捕まえては「反省せよ」などと言ったプラカードを首からぶらさげさせ、連れ回す様子がテレビで放映されました。

「これはやはり権力闘争ではないか」ということを次第に感じるようになったのですが、はっきりと「あれは権力闘争だ。あんなことをして中国はいいのだろうか」と言えば、「あいつは中国の歴史がまったくわかっていない。中国革命とは何であるかもわかっていない。中国近現代史をもう一度初めから勉強し直してこい」と言われかねないような時代でした。とくに『朝日新聞』の場合、文化大革命は立派な政治運動であり、革命のなかの革命、人類史上初めての壮大な実験などかなり持ち上げていましたから、私のような若い記者が「つまらない」とか「無茶苦茶だ」「あれは権力闘争だ」と言うと、「何もわかっていない」と一蹴される雰囲気でした。私は新聞社の編集方針に従って仕事をしていたわけですが、あとになって振り返ると、非常に残念であったし、勇気がなかったと思うことがいっぱいあります。

中国自身もその後、「あれは10年間の暗黒の時代だった」と総括しています。1966年から毛沢東が死んだ76年までの10年間は、暗黒の時代だということです。まさに大変な権力闘争でした。片方は、毛沢東を頂点とす

る文革派で、非現実的であるとともに無慈悲な行いをした連中です。もう一方は、比較的穏健であり現実的でもある、後に国家再建に大変な役割を果たした鄧小平などが中心になっていた実権派です。この文革派と実権派の権力闘争であったわけです。これは歴史的流れを見ても、そういうことが言えるのではないかと思います。いずれにしても大変な事件があったおかげで、私は早くに東京の中国問題を扱う部署に転勤することができたわけで、文革をあまり悪く言うわけにもいかないのです。

中国では、暗黒の10年間がなければ、もっと早く経済発展していたのではないか、あの10年間はまったくロスだった、と言う人がかなりいます。でも私は、そうでもないと思っています。無駄のように思われますが、大変な権力闘争を経験したからこそ、そのあとの鄧小平時代の改革開放政策が比較的スムーズに進められたのではないのでしょうか。「文化大革命のようなことはよくない、だから自分たちは新しい政策を進めているのだ」と改革開放政策を説明するとわかりやすかった。それで大衆は鄧小平の言うことに付いていった。だから私は、文化大革命はないにこしたことはないが、まったく無駄ではなかったという気がしております。文化大革命中には、皆さんもご存じの林彪事件もありましたが、これに触れていると時間がありませんので、割愛します。

ただ一つ、ここで言うておきたいのは、周恩来という政治家についてです。周恩来がいたから日中国交正常化がうまくいったと言われていきますし、中国人の周恩来に対する評価はきわめて高く、周恩来は立派な人だ、立派な政治家だと言われています。この中に留学生が何人かいるでしょうが、彼らに聞いても、周恩来を批判する人は一人もいないと思います。私は彼を批判するわけではありませんし、私も周恩来は立派な政治家だと思っていますが、文化大革命のとき、周恩来はナンバー2で、毛沢東の次のポストにいたわけです。毛沢東が変なことをやろうとしたとき、どうして周恩来は止めることができなかったのか。体を張って、止めさせることができたのではないかという気がします。当時のいろいろな記録フィルムを見ると、周恩来は毛沢東の前では頭ばかり下げています。彼が中国人か

ら評価されているような政治家であるなら、文革阻止にもう少し頑張れなかったのか、というのが私の感想です。これについては、時間ができたら「文革と周恩来」に的をしぼって調べたいという気がしています。

文化大革命が始まった当時の中国は、ソ連との関係が非常に悪く、1969年には中ソ国境で戦争をしています。中華人民共和国ができた当時、中ソは切っても切れない仲で、一枚岩のように結束していると世界中が見ていました。しかし、20年ばかりで中ソの仲は極端に悪くなったのです。

そういう中国を取り巻く国際環境の中で、注目しなくてはならないのは、国内では文化大革命という大変な政治・権力闘争をやりながらも、アメリカとの関係をよくしようとする動きが起こっていたことです。1971年3月に「ピンポン外交」がありました。名古屋で開かれた世界卓球選手権大会に中国もアメリカも参加しました。そこでアメリカと中国の選手の交流が始まり、大会後に、中国はアメリカの選手を北京に招待しました。皆、びっくりしました。仲の悪いアメリカと中国が仲直りを始めた。それがいわゆるピンポン外交でした。私も当時、卓球大会場で、アメリカの選手と中国の選手が交流を始めたのを目撃しています。これは何か変だな、と思いました。

話はちょっと逸れますが、ついこの前まで中国の外務大臣をやっていた唐家璇さんは当時、中国の卓球選手団の通訳として日本にやってきていました。私はそこで彼と初めて出会いました。それ以来、30年以上お付き合いをしています。当時、中国がなぜ急にアメリカの選手を招待したのかと聞くと、「そういう国際情勢ではないですか」という返事が返ってきたのを覚えています。その1971年の7月、夏の暑い最中にキッシンジャー米大統領補佐官が、パキスタンから北京に特別機で乗り込み、中国首脳陣と会談しました。その会談後、ニクソン米大統領が翌72年に中国を訪問するという劇的なニュースが発表されました。当時、日本は佐藤栄作内閣で、日米関係はいまの小泉純一郎首相とブッシュ大統領の関係とまではいかなくとも、佐藤さん自身はニクソンとはかなり親密な関係にあると思っていたのです。しかし、ニクソン訪中の情報が佐藤さんに伝えられたのは、アメ

リカと中国が「ニクソンが72年に中国を訪問する」と公表した、わずか数分前だったのです。佐藤さんはびっくりして、「自分は日米関係はうまくいっていると思っていたけれど、こんな大事なことをどうして教えてくれなかったのか」とがっかりしたのです。それで当時、日本では、「ニクソン・ショック」という言葉が流行りました。何かびっくりすると「おう、ニクソン・ショックだ」と皆が言うようになりました。それほど衝撃的な出来事でした。

1971年は、文革はまだ完全に終わっていませんでしたが、中国が国際舞台に出ていく記念すべき年でもありました。その秋には国連に参加しました。それまでは、台湾しか支配していない中華民国—国民党政府が中国を代表して国連の議席を持っていたわけですが、やっと大陸を支配する中華人民共和国が国連に入ったのです。そして翌年、ニクソン訪中が実現しました。アメリカの歴史の中で、国交のない国に大統領が足を踏み入れたのはこのときが初めてだったわけです。その72年秋、日本も、台湾（中華民国）との関係を絶って大陸との関係をつくりました。つまり、日中国交正常化が実現したわけです。

この正常化については、当時の田中角栄首相が英断を下したと言われていますが、当時の国際情勢の流れの中で、とくにアメリカと中国の関係改善の動きの中で、日本は中華人民共和国と関係を回復しなければならない情勢にありましたから、誰が総理大臣であっても正常化にもっていかざるをえなかったのではないかと思います。角栄さんが思い切ってやったのだということになっていますが、別に角栄さんでなくてもよかったのではないかと思います。

### 毛沢東・周恩来の死と毛沢東批判——香港・北京駐在記者時代

日中国交正常化が実現した翌1973年に、私は海外駐在記者を初めて経験することになりました。最初に行ったのは香港で、そこに4年と3ヵ月いました。当時の香港はいまから思うと面白い所でした。何が面白かったのか。当時、北京にはすでに日本の大使館もあり、日本の記者も駐在していまし



た——日本と中国の記者交換は64年に始まり、今年は40周年に当たります——が、中国の様子はなかなか伝わってこない。というのは、新聞記者が北京にいても、自由に取材することができない。ホテルの一室に事務所兼住まいを与えられ、毎日出歩く場所も限られ、自由にどこへでも行けるわけではない。自由に人に会うこともできない状態だった。したがって、中国の中で何が行われているのか、香港でいろいろな情報を集めて発信する。これが日本では貴重な中国情報になっていたわけです。当時、日中間に直行便は飛んでいませんでした。だから中国大陆に行くには、まず香港まで飛んで、香港から列車で中国内に入る方法が取られていました。日本人に限らず、諸外国の人たちも、ほとんどが香港を通じて中国大陆に入り、出る時も香港を通して出ていく。香港は中国の玄関の一つであったわけで、いろいろな人が行ったり来たりし、いろいろな情報を落としていく。それが香港の新聞などに出る。それを私は朝から見て、「これは面白そうだ。価値のあるニュースだ」と思うものを東京へ送る仕事をしていました。

よく言われるように、香港情報は、いいものから悪いものまで、正しいものから正しくないものまで玉石混交でしたので、それをどのようにえり分けていくか、これは大きな仕事の一つでした。何度も「毛沢東が死んだ」、「周恩来が死んだ」などと、中国要人死亡のニュースが入ってきましたが、ニュース源をいろいろ探してみると、本当ではない。嘘だったことがしばしばありました。狼少年ではないが、またかと思っていたところ、1976年に本当のことが起こりました。その年の1月に周恩来が亡くなり、9月には毛沢東が亡くなった。大きな時代の転換の年でした。周恩来のとき、正式発表の4時間くらい前に死亡を聞きましたが、香港情報はどこからどこまでが本当か嘘かわからないので、思案しているうちに、正式発表が出てしまいました。新聞の場合、4時間も差があれば、特ダネになります。毛沢東のときはもっと早い時間に、「死んだらしい」という情報が入ってきました。周恩来のときに失敗したので、「こんどは間違いないだろう」と思って書いたのですが、東京にも早くから情報が入っていて、特ダネにすることはできませんでした。

周恩来が亡くなったとき、香港島にある中国銀行——いまは40階か50階建ての立派なビルになりましたが、当時は20階ぐらいの建物——の中に周恩來の写真を飾り、弔問や記帳をする場所がつけられました。私も行きましたが、銀行の周囲の道という道をグルグルと弔問客が並び、文字通り長蛇の列でした。それが1日だけではなく、3日も4日も続いたのです。周恩來という人は中国人から大変慕われているのだな、とひしひしと感じました。毛沢東が死んだときも、やはり同じ銀行の同じ場所で弔問が行われましたが、周恩來のときに比べると列が非常に短い。もちろん1日目はかなりの列が続いていましたが、2日目には短くなった。ここでも中国人の、毛沢東と周恩來に対する受け止め方、感情の違いがよくわかりました。毛沢東は偉大な革命家であり、政治家であり、哲学者であり、いろいろな肩書きをつけて尊敬されていましたが、中国人がどちらを慕っていたかといえば圧倒的に周恩來だったわけです。毛沢東は威厳があり、カリスマ性が強すぎて、近寄りがたいところがあったのでしょう。それに比べ、周恩來は皆から慕われていたわけですから、文革のとき、どうしてもっと活躍しなかったのか、というのが私の疑問です。

毛沢東死亡の際、「やがて毛沢東批判が行われるだろう」と強く感じました。文革でかなりひどいことをやっている人ですから、批判が出ないのはおかしい。しかし、偉大なる指導者ですから、すぐには出てこないと思いました。早くて10年、たぶん20年たったら毛沢東批判が出るだろうと考えていました——内輪の集まりでそのことを話したこともあります、活字にしていないので、本当にそう思っていたとしても、あとになっては証明のしようもない——。ところが、意外や意外、死後わずか2年の1978年に出てきました。これは毛沢東を偉大な指導者と認めながらも批判的な人が非常に多かったことの証しでしょう。

1977年、私はいったん香港から日本に帰り、その翌年、今度は北京に赴任しました。赴任早々この毛沢東批判騒動にぶち当たったのですが、非常に残念なことをしたと思いました。香港から「毛沢東批判は必ず出る」という記事を書いておけばよかったと、後悔したのです。78年11月19日、日

曜日の夜でした。当時、北京には日本料理屋が2軒ぐらいしかなくて、それも日本料理まがいのものが出る時代でした。外国人は出歩く場所が限られており、食事に行く場所も限られていました。当時、新聞社、通信社、テレビ局など日本の報道関係者は共同通信以外、各社1人で全部で8、9人いたと思います。日曜日の夜はその連中と休戦協定を結んで、一緒に食事をしたり、麻雀をしたりしていました。その夜は仲間3人で食事をしていました。そこへ「大変だ。毛沢東批判の壁新聞が出ている」との情報が入ったのです。8時過ぎだったと記憶しています。

北京市内を、東西にのびる長安街という大きな道路があります。その中央あたりに天安門・故宮があるわけですが、故宮から西へ3キロほど行ったところに、南北にのびる西単通りがあります。この通りと長安街が交差したところに、当時、長さ200メートルぐらいのブロック塀が長安街に面してありました。そこに壁新聞——中国では「大字報」と言っていました——が貼り出されたのです。毛沢東批判の最初の大字報は小さな便箋14枚にびっしり書かれたもので、そのどこに毛沢東を批判した内容があるのか、夜でしたからそれを見つけるのが大変でした。たまたま他の新聞社の仲間と一緒に食事をしていたので、1人が懐中電灯を照らす、1人がその文章を読んでいく、そして1人が筆記するという共同作業をやったのです。そうしなければ、おそらく翌日の朝刊には間に合わなかったと思います。いまから思うと、日本語で書いてあるのならいざ知らず、中国語で書いてあるものを速い速度でよく読んだものだ后感心します。人間は、必死になると何でもできるものですね。中国の人の字は達筆で、わかりにくいところがいっぱいあります。それを14枚も読んでいったわけですが、その中に「晩年の毛沢東はいろいろな要因から、四人組を支持した」とありました。当時、江青という毛沢東の奥さんを中心にした側近グループが毛沢東を祭り上げて、勝手なことをやっていました。それを「四人組」と言いました。毛沢東は「四人組」を支持して、鄧小平を政権中枢から追い出したのです。この政争のいきさつを、毛沢東の名前を入れて書いてありました。

それまでも何となく、「これは毛沢東のことを指しているのかな」と思わ

れるものはありましたが、はっきりと「毛沢東は四人組を支持した。そして鄧小平をやっつけた」と書いてある壁新聞は初めてでした。誰が書いたのか。何も書いていないと無責任すぎますが、この大字報には「北京市在住の自動車修理の免許証 0538 の所有者である」と書いてありました。これは間違いない。翌日の日本の新聞は各紙とも一面トップで、『朝日新聞』は9段抜きの扱いでした。

それからというものは、毎日朝6時頃から——この壁新聞というのは次から次へと人が来て、どんどん貼っていきます。だから「これは昨日貼ってあったからいらない。これは新しい」というふうに仕分けるだけでも大変なんです——夜の10時、11時近くまで、現場と支局の間を行ったり来たりするわけです。それが2週間近く続きました。もう少し続けていたら何人か倒れていたと思いますが、幸いにしてそのくらいで終わりました。これが中国現代史の大転機となったのです。

### 改革開放の時代——鄧小平を目の当たりにして

鄧小平時代は、この1978年11月の毛沢東批判前後から始まったと言ってよいでしょう。このころから中国は大きく変わりました。私たち外国人がよく行った「国際クラブ」という集会所が北京にあります。そこでは食事也能するし、散髪もできる。運動しようと思えば卓球もできる。プールもありました。クラブの広間は普段、何も置いてない。何か集会があるとき椅子を並べるのですが、ある日突然、そのただっ広い広間にグランドピアノが置かれて、女性ピアニストがきれいな曲を弾いている。これはいったい何事かとびっくりしました。現在、国際クラブは一部建て替えられていますが、当時はそれほど立派な建物でもなく、殺風景なものでした。そこでグランドピアノの演奏が始まったのだからおどろきました。そして外国人と中国人の接触も、比較的容易になりました。それまで外国人の家を中国人が訪ねることは基本的にできなかったのですが、壁新聞やピアノが現れたあとには、外国人と接触できる立場の中国人は外国人の家を訪ねてもいいことになって、次から次へと人が来るようになりました。

ところが、中国人が私たちの家に来て一緒に酒を飲んだり、一緒に歌ったりして遊んでいるうちに、やはり「行き過ぎだ」、「早く開放しすぎる」との意見が強まり、引き締めが始まりました。私の家に遊びに来た何人かの中国人が当局に捕まりました。一部の人は1日の説教で釈放されましたが、中には労働改造所に連れていかれた人もいたと聞きました。時代が変わったと言っても、まだまだ当局が引き締めたり、緩めたりという起伏の激しい時代でした。私は1978年から81年まで、それから84年から87年まで、6年半ほど北京にいましたが、まさに鄧小平時代の躍動期で、非常に面白いときだったと思っています。

そういう時代だったので、鄧小平さんを2、3メートルの至近距離で見る機会が百回以上ありました。中国の要人は外国から代表团や要人が来ると、会見をします。そのとき必ず各国の駐在記者を呼んで、会見冒頭取材をさせます。日本から歴代首相が来ましたが、首相がやって来ると鄧小平がだいたい会う。その場合、いつ、どこで会うとの連絡がくる。たいていは人民大会堂で会うわけですが、ちょっと早い時間に行って会見場所の入口あたりで待っていると、鄧小平さんが軽い足どりでやって来る。その際、いつも2、3メートルの距離で鄧小平さんを見ることができたわけです。彼は機嫌のいい日と悪い日の態度が極端に違いました。何度も見ていると、彼の動作、顔色、目つきで「きょうは機嫌がいい」「きょうは悪い」とすぐわかります。機嫌のいい日は、「皆さんいつもご苦労だな」とか「きょうは天気がいいね」とか、声をかけてきます。ところが機嫌の悪い日は、黙って会見場に入っていく。ですから面白いのは、会見後の代表団のブリーフィング内容を予測することができたことです。例えば日本の代表団が鄧小平さんに会う。ブリーフィングの前に「きょうは、日本に対していいことを言っている」、あるいは「きょうは厳しいことを言っている」と予想するわけですが、80%から90%当たりました。鄧小平さんが機嫌のいい日はいい話をする。機嫌の悪い日はいい話をしない。いつも間近に接していると、彼の考えや政治の進め方が何となくわかってくるのです。

鄧小平は、「中国はいつまでも貧しいままでいいのか、貧しいのは社会主

義ではない。豊かにならないと社会主義は実現できない」と言いましたが、その通りです。鄧小平は現実主義者だと言われていますが、確かにそうだと思います。彼が大きく舵を切って中国の進む道を変えたわけです。毛沢東は、「平等が大事で、貧しくとも等しくあることが大事だ」（毛沢東時代の平等中心主義）と考えていましたが、鄧小平はそうではない。彼はとにかく豊かになろうと呼びかけて、いま進められている改革開放政策＝経済重視政策を始めたわけです。いまのところ、経済発展そのものはうまくいっていると思います。

鄧小平を褒める前に一言だけ。1989年6月4日の天安門事件は、皆さんもテレビでその様子をご覧になったと思います。天安門広場で若者たちが民主化・自由化、あるいは生活の改善を求めてデモや座り込みをしました。それに対して中国当局は、これは動乱であり、反革命行為だとして解放軍を出動させて、鎮圧した事件です。中国側の発表では死者が二百数十人、負傷者が約3,000人となっていますが、当時の状況を目撃していた人たちは、もっとたくさんの死傷者が出たはずだと言っています。いずれにしても、大変な事件でありました。これは鄧小平が「改革開放政策によって、民主化・自由化も進めていく」と言ったことに期待を抱いていた若者たちが、実際にはなかなか事態が進展しないことに苛立ちを覚え、もっと早く民主化・自由化、さらに生活改善を進めるよう要求して騒ぎだしたものです。鄧小平にすれば、自分のまいた種が逆風となって押しよせてきたわけです。

あの天安門事件の鎮圧の仕方——軍を出し、鉄砲を撃ち、戦車まで出動させた——には私は反対です。あの鎮圧は鄧小平が命令したそうですが、あれは絶対によくない。日本など先進国だと、まず警察が出て放水したり催涙ガスを使って、何とか騒ぎを鎮めると思います。いきなり軍隊が出て鉄砲を撃つようなことはしない。中国は、催涙ガスを使ったり、放水したりしてデモを鎮圧した経験がなかったのも事実ですが、いきなり軍隊が出たのはまったくよくないことです。しかし、天安門事件を抑えたのは、振り返ってみると間違っていなかったのではないかと私は思います。ゼミの留学生に抑え方には反対だが、抑えたのはよかったと話をしてしましたら、彼

らは「あのやり方は間違っていない」と言いました。「13億人もいて国土も広い。いろいろな考えの人がいる。生ぬるい抑え方ではまたすぐに盛り返してくる。北京で駄目なら上海で、上海で駄目なら広東で、さらに地方都市へと広がる。だからあそこで思い切って軍隊を出し、徹底的に抑えないと、中国の場合、そう簡単には事態を治めることはできない」と言うのです。留学生の話を聞いて、なるほどという気がしました。いずれにしても、私は軍隊が出て抑えたのは反対です。しかし何らかの方法で抑えなければならなかった。結果的に抑えてよかった。なぜなら、もしあの騒ぎが全国に広がっていたら中国はまたバラバラになっていたかもしれない。国内が乱れてしまうと、今日の経済発展は難しかったのではないのでしょうか。

### 中国経済の現状——看板は社会主義、内実は資本主義

時系列的に話をしていると時間が足りません。「現在の中国をどのように見ているのか」ということを皆さんはお聞きになりたいと思いますので、一気にそちらに話を飛ばします。いま中国は、依然として社会主義の看板を立てています。社会主義とは何か。簡単に申し上げると「みんなが平等に豊かになっていく社会をつくろう」という考え、主義のことです。だが、いま中国が実際にやっている経済活動は、われわれと同じ資本主義です。資本主義社会は、競争社会です。一生懸命に働く。知恵を働かせれば金も儲かる。金があればいろいろなことができる。楽しいこともできる競争社会です。看板は社会主義、実際は資本主義で、競争社会に入ったわけです。

その結果、国内総生産（GDP）は、4年前の2000年にイタリアを抜いて世界第6位となりました。国内総生産は、その国の経済力を反映した数字だと思いますが、中国はすでに世界第6位にまで成長してきたのです。2、3日前の新聞によると、貿易総額は世界第3位。1位はアメリカ、2位がドイツ、3位は日本だったのですが、中国が日本を抜いて第3位になりました。年間貿易総額は1兆1,000億ドル。日本には「中国にすぐ抜かれる」と言う人がたくさんいますが、とにかく大変な勢いで経済発展しています。これは鄧小平の改革開放政策——「社会主義をやっていないじゃないか」と言わ



れてもいい、とにかく豊かになろう——という現実的なやり方が効を奏したと言ってよいでしょう。いま中国の人に「あなたたちは社会主義をやっているのか。それとも社会主義を捨てたのか」と聞くと、「とんでもない。私たちは社会主義をやっています。ただし、いままでの歴史の中でやってきた社会主義とはちょっと違うかもしれない。中国の特色のある社会主義をやっています」との返事が返ってきます。それにつけ加えて、社会主義は初級、中級、高級段階へと移っていくが、いまは初級の段階にあり、この段階では資本主義的なことをやるのも自由だと言います。そしてこの段階は今後、100年間続くと言います。

とにかく中国の人と話をする場合、あるいは中国を理解しようとする場合、われわれ日本人の波長ではどうにもならないところがあります。長い歴史と奥深い文化を持つ国ですから、理屈で相手を煙に巻く知恵は十分にあるわけです。小泉さんのように「自衛隊を派遣しているイラクのサマワは安全地帯なのか」と聞かれて「自衛隊がおるから安全地帯だ」というような論理で答えていては、中国とは太刀打ちできません。中国の特色のある社会主義をやっていて、いまは社会主義の初級段階にあり、これから100年間はそのような段階が続くのだと言われると、「そんなバカな」とも言えず、どうしようもないわけです。中国が今後、これまでの社会主義理論に沿った社会主義国に発展していくのかどうか分かりませんが、いま一番の目標は強い国、豊かで軍事力も強い国、つまり富国強兵の中国をつくることではないかと思っています。それができたら、ひょっとすると、もうそれでいい、ということになるのかもしれませんが。いまの留学生たちが指導者になった頃に、どういう方向に進めばいいのか決めることになるのではないのでしょうか。

ただ、経済発展はうまくいっているように見られがちですが、反面、大変な問題を抱えています。貧富の格差が広がっていることです。貧しい人と豊かな人の格差がどんどん広がっています。私が10月初めに中国に行ったときも、びっくりしました。案内役の中国外務省の若い女性外交官は、すでに自家用車を1台持っているが、日本の自動車は次から次へと新しいも



のが出るの、もう1台手に入れたい、と言うのです。「あなた、そんなに給料がいいの」と聞くと、すごいんですね。本人はまあまあの給料ですが、旦那さんが日本の企業に勤めており、大変なお金が入ってくる。都会と地方、また同じ都会の中でも職種によって大変な貧富の格差が出てきています。これがこれからどうなっていくのか。社会主義であれば貧富の格差があってはならないはずだが、その格差がどんどん広がっている。これがはたして社会主義なのだろうか、という疑問があります。

鄧小平は「先に豊かになった者が遅れた者を助けてやれば、やがては皆が平等に豊かになる」という「先富論」を提唱しています。しかし、人間ですから、自分の財産を投げ出して助けてやろうという人がどのくらいいるのかはわかりません。今年は各地で、農民暴動が起こっています。農民の不満、虐げられた人たちの不満は年々高まっていると言われています。この問題をこれからどのように解決していけばいいのか、というところが非常に気になります。

### 日中関係の展望——相互理解の促進に期待

最後に一言、いまの日中関係に触れておきます。「政冷経熱」という言葉が流行っています。政治関係は冷たくてよくないが、経済関係は非常にいい、ということだそうです。確かに日本と中国の関係は、経済や貿易の面では大変な勢いで交流が進んでいます。一時は中国が経済発展すると、日本は食われてしまって駄目になるのではないかとと言われていましたが、いま中国経済がいいことによって、不況の日本経済はかなり助けられています。これは事実です。ですから、隣の家が貧しいよりも豊かであるほうが、おこぼれを頂戴することもあるわけですから、中国が経済発展するのはいいことです。それに乗かって日本も経済発展していく。したがって、中国経済のさらなる発展が望まれます。

一方、政治は冷たい。政治が冷たい原因は何か。簡単に言えば、小泉さんが靖国神社に参拝している問題です。これまでの日本の指導者、例えば中曽根康弘さんや橋本龍太郎さんが首相のときも靖国神社に参拝しました。

すると中国や韓国が「靖国にはA級戦犯が祀られている。その人たちの前で首相が頭を下げることは、A級戦犯を戦犯と認めていないことになるのではないか。それはひいては、過去の戦争に対して悪いことをしたと、反省していないことだ」と、飛躍していくわけです。小泉さんは、自分が参拝しているのはそんなことではない。国のために一生懸命働いて亡くなった人の霊を慰めるのと同時に、平和祈願のため参拝しているのだと言っています。おそらく彼の言っていることは嘘ではないと思いますが、中国や韓国の人たちの受け止め方は、「A級戦犯が祀られているところで頭を下げるのは、過去の戦争をどのように考えているのか疑問だ。戦争の被害を受けた中国や朝鮮半島の人たちの感情をどう受け止めているのか」ということになるわけです。

私は結論から言って、相手が嫌だと言っていることをわざわざやる必要はない。小泉さんは、首相である間は靖国に行かないほうがいいのではないかと思います。と同時に、中国にも注文をつけておきたいことがあります。中国は「愛国主義教育」を一生懸命にやっています。とくに最高指導者が江沢民になってから愛国教育が盛んに行われるようになりました。日本では愛国教育が足りないと言われていますが、愛国教育そのものは悪いことではありません。ただ、日本が大陸を侵略して戦争をした、その当時の抗日戦争を題材にして愛国教育を進めてきたことに若干問題があります。抗日戦争だけではないが、抗日戦争を題材にしたものが突出しています。これはいかがなものかと私は思います。北京の盧溝橋に抗日戦争記念館という立派な記念館があって、先日そこを見てきましたが、入館してから見終わるまで、ほとんど日本軍隊による虐殺場面などひどい光景の写真ばかり展示してあります。これを見せて愛国教育をすることになれば、知らず知らずのうちに反日的な感情が植え付けられていくのではないかと思います。その辺は中国も、もう少し考えていただきたい。われわれは過去の戦争を無視するものではありません。侵略したことはよくないし受け止めないといけない。戦争は二度としないことを、われわれはもっとはっきりと打ち出していかなければならない。同時に中国も反日教育にならないよう

十分配慮してもらいたい。

日本と中国は相互理解がまだまだ足りないと思います。日本はもっともっと中国を知らなくてはならない。中国ももっともっと日本を知ってほしい。私どもの国際学部には、留学生がたくさんいます。中国からの留学生は、もっと日本を知ってほしい。中国要人が、日本でまた軍国主義が復活していると発言すると、それをそのまま鵜呑みにするのではなく、いまの日本人はどんな考えを持っているのかをよく見てから判断してほしい。そして将来はそうした実体験を基に、日本と中国の間の架け橋になってほしい。われわれは中国人に限らず、韓国やその他東南アジアの人々にも知日派をもっとたくさんつくっていかなければならないのではないかと思います。

これもまた中国の若者への希望ですが、中国は阿片戦争以来、諸外国に痛めつけられてきた。とくに20世紀に入ってから、日本に痛めつけられたという被害者意識を持っているが、そろそろそのことを精算してほしい。日中戦争を歴史としてきちんととらえておかなければならないが、被害者意識をいつまでも持っている、進歩がないのではないかと思います。これは私一人が考えているのではなく、『中国人の歴史観』という本を書いた中国の学者——いま早稲田大学の教授になっています——が、結論のところでそういうことを書いています。中国人は、もういい加減に被害者意識を脱しなければならない。そうしないと、中国は21世紀の新しい時代に、新しい国になっていくことはできない、と書いています。彼だけではありません。私の知っている何人かの中国人も同じようなことを言っています。

これからの日中関係を私はまったく心配していません。すでに日本に来ている中国の若者たちも、非常によく勉強しているし、いろいろなことを考えている。その人たちが指導者になっていけば、もっといい日中関係ができるのではないかと思います。それには日本の学生ももっと中国を勉強してもらわないといけないと思います。

勝手なお喋りをしました。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。50年という長い時間のお話を、約1時間という予定でお話しいただいたので、もっとお聞きしたいという感じでした。ご質問はありませんか。

## 質疑応答

質問 貴重なお話をありがとうございました。中国の社会主義市場経済主義者だった鄧小平は非常に素晴らしいと感じます。しかし現在の胡錦濤政権は、鄧小平理論プラス科学的発展観を主張しています。市場経済発展も必要だけでも、それプラス科学的・合理的な考え方でこれから中国の社会主義を築いていこうという考え方をしているわけです。そういう意味で、清華大学出身の胡錦濤、温家宝というエリートに、私はこれからの中国を期待し、最後に先生が締めくくられたように、未来志向の日中関係を構築していくことが、これから日本と中国に課せられた課題ではあるまいか、という感じがします。その点、先生はいかがですか。

近藤 おっしゃる通りです。いまの指導者の胡錦濤や温家宝は大学の理工系を出ています。日本ではよく「文系」「理系」と分けますが、それでは理系の人たちですから、かなり合理的なものの考え方をしていると思います。ですから、ただ精神論で引っ張っていくことはしないのではないのでしょうか。この間、聞いてきたところでは、胡錦濤は二期トップを務めると言われています。いま一期の3年目ですが、一期の時代は、前任の江沢民の影響力がまだ残っていますから、それなりのことしかやらないが、二期目の5年間には国際社会がもっと理解しやすい中国に変えていくだろうと、言われています。いまの指導者は、おっしゃったように非常に合理的なものの考え方をしているのだと思います。チリでこの間、小泉首相と胡錦濤主席が会いました。直前まで会わないのではないかと言われていました。靖国参拝問題もあり、原子力潜水艦の日本侵犯問題もあるが、だからといって将来のことを考えないわけにはいかない。それはそれとして、日中関係を改善、発展させなければならない。胡錦濤は日本を非常に重視し

ています。彼が35歳くらいのとき、私は初めて会いました。好青年で、その頃から彼は日本に大変関心を持っていると言っていましたので、これから日中関係はよくなってくると思います。

今晚、温家宝さんと小泉さんがまた会います。これだって、会わないと言っていましたがおうわけです。場所はよその国を借りていますが、こういう現象が出てきたことは、日中関係を中国が重視していることの現われです。

(2004年11月30日)